北海道大學新聞
笑いたきゃ、観ろ。
'Title'の替歌
「大老」

第63回七大戦 非主管校として初の優勝

9月25日、東京大学が学費を10万円値上げすることを決定した。学費値上げが取り沙汰されるほど、国立大学の財政が逼迫している。その中で、そもそも国立大学が有権者である国民から、公金を投入するにふさわしいと判断されているかどうか、その理由が何かというのは、大きく関心を呼ぶ事柄である。

「北大は公金投入に値するのか？」【特集】街頭調査

これを受けて、北大新聞は特に北大が市民にどのような評価を受けているかを明らかにするため、9月13～15日にかけて、札幌駅前南口広場において街頭調査を行った。

総回答数は171件となった。回答数は満足とは言えない規模であり、年齢などにも一定の偏りがあるため、回答結果が指し示す割合などは、注意して見る必要がある。

それを踏まえて、この調査は、ある1問をのぞいた人が、ほかの設問でどのような回答をしたのか、どういう回答をする人が、「公金投入の意義」を感じるのかといった傾向をつかむために作成された。

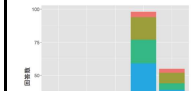
質問内容は以下のとおりである。①「北海道大学には、公金が投入されているが、納税者として、その意義を感じているか」②「北海道大学は、地域の発展に役立っていると思うか」③「北海道大学の学生に、好感を持つか」④「国立大学への交付金は、どうするべきだと思うか」⑤「現在、北海道に居住していないが、かつて住んでいた場合は、かつて住んでいたか？」⑥「あなたの年齢をお聞かせください」⑦「貴方の性別をお聞かせください」

回答結果

それぞれの質問への回答結果は以下のとおりである。

「北海道大学には、公金が投入されているが、納税者として、その意義を感じているか」については、「とても感じる」が3.2%、「やや感じる」が57.3%、「あまり感じない」が29%、「感じない」が12%、「わからない」が6.4%である。

「北海道大学は、地域の発展に役立っていると思うか」については、「とてもそう思う」が3.2%、「そう思っている」が60.2%で、「どちらでもない」が38.6%、「減らすべきと思う」が1.2%だった。地域貢献と公金投入の意義はどう関わっているかについては、北大が地域の発展に役立っていると思わない」と「わからない」と答えた人の場合は64%であった。



地域貢献と意義

「北海道大学の学生に、好感を持つか」については、「好感を持つ」が59%、「あまり持たない」が3.5%、「わからない」が12.9%で、「持たない」と答えた人の場合は、「国立大学への交付金はどうするべきだと思うか」については、「増やすべきと思う」が60.2%で、「どちらでもない」が38.6%、「減らすべきと思う」が1.2%だった。地域貢献と公金投入の意義はどう関わっているかについては、北大が地域の発展に役立っていると思わない」と「わからない」と答えた人の場合は64%であった。

〈4面へ続く〉

10月号
無料 [Take free]
＜編集・発行＞
北海道大学新聞編集部
＜ウェブサイト＞
「THE MAINSTREET」
hokudaishinbun.com
ウェブサイト
Twitter (@HokudaiShinBun)
web上で様々な記事を公開中！

CONTENTS
・ヒグマによる被害を防ぐには …2面
・受験特集 どんな道でも、道は道 …3面
・北大と釧路の架け橋「北大くしろ会」 …4面

1400km離れた学生と奏でる

北大×京大ジョイントコンサート2024

8月26日、カナモトホール（札幌市民ホール）にて開催された、北海道大学交響楽団×京都大学交響楽団ジョイントコンサート2024（以下、ジョイントコンサート）。演奏旅行や各地の大学との合同演奏会を5年周期で行っている京都大学交響楽団（以下、京大オケ）と、5年ぶり12回目の合同演奏会が実現した。1400㎞離れた京都の学生と共に奏でる音楽と、そこに託された思いに迫った。

合同練習2日目

ジョイントコンサートへ向けて北大生と京大生が合同で練習できる期間はわずか3日間。

1日目を終えた時点での練習の様子について、北海道大学交響楽団（以下、北大オケ）のコンサートマスター武田柚希さん（医学部5年）は「楽譜は一緒でも、どういう曲にするのかという考え方が根本的に違っていた」と話す。たとえば合同曲の「薬劇『ニュンベルクのマイスタージンガー』より第1幕への前奏曲」では、緩慢さを重視する京大に対し、北大は重厚感のある演奏。京大から指揮者を招くこの曲では北側が対応したいとし、他方京大にとっては北大選出の「北海の幻想」が山場だろうと話した。

昔の姿を取り戻す 伝統曲への回帰

ジョイントコンサートの曲目は例年大きく変わらず、弾き慣れたものを演奏することが多い。しかし、合同曲の「北海の幻想」は、これまでとは一味違った意味を持つという。

今回の「北海の幻想」は、どう特別なのか。それには、ある「縁」が関係していた。この曲で指揮を振る野村聡氏は、作曲者である川越守氏の教え子なのだ。

指揮を振る野村聡氏
（提供：北大オケ）

〈2面へ続く〉

免許取得をお考え中の皆様へ
オンライン
学科教習 実施中！
北大近くにも
無料送迎バス
が来てます！
桑園自動車学校
☎011-271-7511

北大の「今」を発信中！
THE MAINSTREET
Powered by 北海道大学新聞編集部
X@HokudaiShinBun
Instagram@hokudaishimbun

北大くしろ会

地元愛は必須じゃない。でも釧路と北大の架け橋に

2024年の北大祭（当時）。写真左奥が兒玉さん（写真提供：兒玉さん）

「釧路の回転寿司一天チェーンの食べ比べをしませんか？」。8月上旬、北大くしろ会の代表、兒玉拓巳さんとまくみ」さん（大学院博士2年）からこんなLINEが届いた。北大くしろ会は2023年4月設立の、釧路出身や釧路にゆかりがある北大生や卒業生、札幌圏の大学生から中心に構成される県人会だ。北大祭では2023年にソウルフードの「ミニフレンチドッグ」、2024年に「鰯さん」を来場者に振る舞った。特定の約4時間、地元から遠く離れた札幌で暮らすメンバー達が抱える、故郷への単純ではない思いに迫った。

変わった"県人会"

北大には同郷の学生から成る、多くの県人会組織が存在する。一方、北海道の一市町村・地域に限定した同郷サークルは稀だ。代表の兒玉さんは釧路出身。東京での社会人生活を経て、2023年に北大医学院博士課程に入学。釧路と札幌を行き来する中で、釧路出身の北大生に地元を理解してもらうきっかけ作りができないか、そんな思いから設立したのが北大釧路会（現北大くしろ会）だった。

普段の活動では、月に1回、10人前後の参加者が集まる。これまで北大祭の出店準備や、釧路での観光企画を行ってきた。また、札幌で手に入る釧路のソウルフードの試食会も行う。釧路出身の北大生を中心に、くしろ会のLINEグループには約60人が参加しているが、一方で、卒業生などの「大人」も多く参加するのが特徴だ。学生主体だが、「大人も巻き込んだ組織作り」団体を目指す。北大釧路会は北大くしろ会（以下、くしろ会）に改称し、釧路近郊の出身者やこれまで釧路と関わりがなかった人にも門戸を開いている。つまり、くしろ会は「郷土愛」を前提としないのだ。

美味しいのはどっち!?

釧路回転寿司 一天チェーン食べ比べ

釧路に直接縁のない人は普段どんな活動をしているのか。設立当初からのメンバーである大崎美優さん（工学部2年）は宇宙出身。釧路を訪れたことはなかった。

取材当日、活動場所の机の上には店舗名が伏せられた2つの寿司桶が並べられた。「まつりや」と「なごやか亭」の寿司だ。

「まつりや」と「なごやか亭」の寿司（撮影：8月27日）

「北大くしろ会」

「同様に、さんまや甘えびなど両店のネタを交互に口へ運ぶ。味わう内に、それぞれのネタに対する考えが分かる。例えば、シーチキンは、片方はツナそのものの味を強調し、もう片方はサラダのような様々な野菜を使い、食感を楽しませてくれた。これは脂ノリが違う、"濃厚さがたまらない"と感嘆をしている内に全7種の食べ比べが終わった。

「公正に票作できるよう頑張ります」と大崎さんと共にまくろ」を船張った。

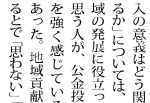
もちろんどちらの店の一貫も美味だ。しかし、身の厚みや繊維のきめ細かさには違いがあった。

「釧路の人の釧路愛は強いわけではない」

釧路を様々な面から愛するくしろ会には、元々郷土愛の強い人が集っていると思いがちだ。しかし、実際はそれほど単純な話ではない。釧路の人の釧路愛はそんなに強いわけではない」。代表の兒玉さんはそう話した。

釧路の人口が減少し、衰退が進む釧路の街。若い世代の流出は深刻な問題だ。くしろ会の北大生は、釧路随一の進学校である釧路湖陵高等学校の卒業生が大半。メンバーの三宮郁弥（みどみこうや）さん（工学部3年）もその1人だ。三宮さんは「湖陵の生徒は大学進学の際に、（選択肢の少なさから）釧路を出さざるをえない」と話した。「釧路を離れるという意味で周囲の釧路への愛情は強くない。

ただ、釧路を離れて生活を送る中で"地元の魅力が鮮明に"浮かび上がってくる。「釧路はそれなりに好き」。



意義を感じるか

駿台 SUNDAI
がんばれ、受験生！

札幌のように人口が多いと感じることもなく、冬は寒いが夏は涼しい釧路の気候は過ごしやすい。三宮さんは「IT関連の職に就いてテレワークができれば」と、将来は釧路に住みたいと語った。

釧路出身の皆が地元を愛していたわけでは無い。それなって、「釧路は、どん底時代を迎えた」と語る。釧路で長く暮らす人ほど釧路の事を良く語ることは少ないそうだ。「釧路愛」は薄しも持っているものではない。

人口が減少し、衰退が進む釧路の街。若い世代の流出は深刻な問題だ。くしろ会の北大生は、釧路随一の進学校である釧路湖陵高等学校の卒業生が大半。メンバーの三宮郁弥（みどみこうや）さん（工学部3年）もその1人だ。三宮さんは「湖陵の生徒は大学進学の際に、（選択肢の少なさから）釧路を出さざるをえない」と話した。「釧路を離れるという意味で周囲の釧路への愛情は強くない。

ただ、釧路を離れて生活を送る中で"地元の魅力が鮮明に"浮かび上がってくる。「釧路はそれなりに好き」。

公式の地域同窓会に

北大くしろ会

最後に代表の兒玉さんが、くしろ会の今後について展望を語ってくれた。「釧路の北大生は、釧路市も近年、スタートアップの誘致やワーケーションを先ごしての広報や本格化させ、街の活性化に取り組んでいる。

くしろ会は釧路出身の北大生だけでなく、卒業生や、学の筑波大には沖縄県人会があった。沖縄県出身の皆さんが、釧路の広い川など、最初から、Uターンなどによって人口を増やそうとするのではなく、まずは釧路にゆかりのない人までも巻き込んだ、「釧路の広い川体」だ。

ヒグマによる被害を防ぐには

「ヒグマの会」会長に聞く

ヒグマ取材班

2023年10月に北大生がヒグマに襲われ亡くなった事故を受け、北大新聞ではヒグマについての取材・報道を行っている。今回は、北大大学院獣医学研究院教授であり「ヒグマの会」会長も務める坪田敏男教授に取材し、ヒグマによる被害を防ぐための対策について話を聞いた。ヒグマによる事故を減らすため、私たちにもできることはあるのか。

「対処」ではなく「予防」

北大新聞では2023年11月にヒグマに関するアンケートを行い、遭遇時の対処法を知っているかという点に焦点を当てていた。しかし、ヒグマに遭遇する事自体に問題がある。

ヒグマに出会った場合の対処について坪田教授は、「なかなか難しく、どういう状況でヒグマに出会うかによってかなり変わってくるため、一概には言えない」と語る。ヒグマとの距離や遭遇した場所によって適切な対処を選択するのは難しい。

そこで、そうした状況を生み出さないための予防が最も大切だと坪田教授は言う。「ヒグマは人を怖がる警戒心の強い動物なので、こちらが対応を間違わなければ襲われることはほとんどない。」とたとえて、「交通事故と同じで、事故に遭わないようにどうするかではなくヒグマに遭遇しないようにするかを考えるべきだ」と語った。ヒグマのいそうな場所に行く際に、「ヒグマに出会ったらどうしよう」と考えるのではなく、「ヒグマに出会わないための準備や知識があるか」を確認するのが大切だ。

具体的には、クマ鈴を持ったり、声を出したり、手を叩いたりするのが効果的だ。ヒグマに自分の存在を知らせることで、ヒグマに避けてもらうことが重要である。また、ヒグマが出るような場所では周りに気を配り、フンや足跡などのクマの痕跡がないか注意する必要がある。

新たな課題 ーアーバンベアの出現ー

しかし近年、そういった対策が通用しない問題がある。アーバンベアの増加だ。アーバンベアとは市街地に出没するクマのことで、2021年には札幌市東区の市街地に現れ、4人が負傷した。

坪田教授によれば、アーバンベアの増加には主に2つの要因がある。

一つはクマの数の増加だ。全道的な個体数が減る中で、川越氏が亡くなり、コロナ禍で演奏会の頻度が減ったことで意識されてきた部分もあったという。野村氏が市街地に出てくるという。

もう一つはハンターの減少だ。昔はハンターが山に行きクマを追いかけまわして撃っていたが、現在そうしたハンターはほとんどいない。それによってクマの本来の「人間を怖がる」という性質が薄れつつある、と坪田教授は語る。人がクマに対してあまり攻撃しなくなったことで、人の存在が怖いものである、ヒグマに学習させる機会が減ってきているのだ。実際に数年前に札幌市南区にクマが出た時、クマは人家の庭先でなにかを食べていたが、人の気配を全く気にしていなかったという。

ハンターの高齢化と後継者不足による人口の減少は、ヒグマの駆除体制にも支障をきたすだろう。ハンター不足の背景には、狩猟に対する社会的な関心の低さがうかがえる。特に若者が狩猟に興味を持つようにヒグマ対策に直接関わることは難しい。

だが、ヒグマの生態について知ったり、今あるヒグマの問題や課題に関心を持ったりすることは誰にでもできる。インターネットや図書館でヒグマに関する情報は得られるだろう。また、北大総合博物館で販売されている「ヒグマ・ノート」という小冊子には、ヒグマに関する知識が分かりやすくまとめられている。まずはこれらを活用してヒグマという動物について知り、ヒグマと人間との共存について考えてみて欲しい。

（取材・執筆：木本）

私たちにできること

行政が行うヒグマ対策に加え、一般市民にできることもある。山に行く人はヒグマに出会わないように予防を徹底することが必須だ。山に入る機会のない人にとってヒグマ対策に直接関わることは難しい。

だが、ヒグマの生態について知ったり、今あるヒグマの問題や課題に関心を持ったりすることは誰にでもできる。インターネットや図書館でヒグマに関する情報は得られるだろう。また、北大総合博物館で販売されている「ヒグマ・ノート」という小冊子には、ヒグマに関する知識が分かりやすくまとめられている。まずはこれらを活用してヒグマという動物について知り、ヒグマと人間との共存について考えてみて欲しい。

（取材・執筆：木本）

どんな道でも、道は道
誰のためかは自分で決める
2度目の受験と恩返し

宗石晃尚さん（医学部2年）

「大学には、いろんな人がいる」そんな言葉は、誰しも一度は耳にしたことがあるだろう。だが、私たちはまだ「いろんな北大生」が北大生になった時の話を知らない。聞けそうで聞けない、在り日のそんな話を取り上げるのが今回の特集「どんな道でも、道は辿」だ。はたから見ればバラバラな、でもそれぞれにいればそれぞれに大きな選択にじっと耳を傾ければ、等身大の北大生が見えてくる。

今回の主人公は、医学部医学科2年の宗石晃尚（あきひさ）さん(2)＝北海道釧路湖陵高校卒業＝だ。落ち着いた穏やかな話し方と優しい顔がまぶしい。パレーボールに励むかたわら、北大ろしろ会にも所属し、同郷同士の交流を深めている。

フロンティア入試で工学部に受かってしまった宗石さんが、家族愛と郷土愛を胸に北大の医学生になる物語。2回の北大受験とその後の学生生活に、いったい何を思うのか。

故郷で過ごした18年間

北大は、落ちるために受けた。「記念受験」でも両親に申し訳ないと思っていた。

生まれ育ったのは、道東・釧路の地。ひとり っ子として育ち、家族との絆は深い。札幌に来てからも、両親や祖母とは、よく電話をつないでいるという。

小学校時代の印象的な思い出は、ピアノを習っていたこと。母と一緒に教室に通い、ろし会にも所属し、同郷同士の交流を深めている。

中学校入学後も、家族と過ごす時間が長かった。母の職場と学校が近く、車で送迎をしてもらう日々。母の退勤が遅くなるときは、生徒会の仕事をして時間を潰しながら、鍵を借りて車内で待っていた。

定期テストの日には、母がとんかつを入れた弁当を持たせてくれた。この験担ぎは高校進学後も続き、やがて大学受験の日にも、宗石さんに力を与えることになる。

湖面を踊む学び舎で

幼い宗石さんにとって、「医師」とはまったく身近な職業ではなかった。小学校時代、なりたかったのはコンビニ店員、というよりは、自宅の前にあるローソンの店員しか「知っている仕事がなかった。

小学校時代は、勉強はできる方だったけど、飛び抜けているわけではなかった。地域の塾に通い、数学が好きになったという。

受験を経てフロンティア入試に合唱で指揮を振ったりもした、と思い出を話す。指揮は友達に持たされたハリーポッターの杖で振ったけど、使いづらくて、間奏で床に置いちゃった」と、冗談交じりに振り返った。

中学校からの推薦で、地元のトップ校である母校の理数科に進学。高校入試の科目は面接と作文、「医学部に行きたい」と言えば面接での受けがいいらしい、という噂を聞き、初めて医師という職業を意識した。

「なんだかんだ楽しかったという高校生活。湖を臨む丘の上の校舎に、週に1回ほど遅刻もしながら通学した。3年間を共に過ごした理数科の仲間とは結束が強く、学校祭では圧勝するなど青春だった。教室では教師に向けて、黒板脇のフリースペースに他愛ない質問を書く、「趣味ありますか」「携帯なに使ってますか」答えを待つのが楽しみだった。漢字を間違え、国語の教師に指摘されては悔しがった。放課後にはバレーボール部の活動に参加。全道大会にも出場した。

高校３年生で出場した全道大会

物理、数学、英語が得意な"典型的な理系"で、特に物理の、少ない知識で戦うも明瞭さが好きで、問題を解くことが楽しかったという。

「これはまずい」

上位20名ほどが北大へ進学する宗石さんの高校。しかし当時、宗石さんが目指したのは東大。「おもしろい人がいそうだし、行ってみたかった」。

ただ、成績上位の生徒は、当然北大へ行くものとみなされる。北大出身者も多い教師陣の授業では北大の入試問題が頻繁に出題された。

家族も、宗石さんが道内にいることを望んだ。「京都や関西にいるくらいなら、行ってもいいよ」とは言われた。しかし、中学受験も、高校の進学先も宗石さんの意思に任せてきた家族が「北海道に残ってほしい」とも、初めて言われた。強制されたわけではなかったが、高校の"空気"や、家族の気持ちを無下にはできない。

そこで宗石さんが取った行動は、北大の総合型選抜を受けること。総合型選抜は一般に合格しにくいとされるため、「北大を受けたが落ちた」という事実をもって、「道内の大学を受けることを許してもらおう」と思った、と話す。

宗石さんが受験した工学部のフロンティア入試は、書類選考、1次記述試験、面接の問題を解いてみた宗石さんの最初の感想は、「これはまずいぞ」。焦りが募る。解けば解けるが、1年に1回しかないフロンティア入試は、合格した場合の入学辞退ができない。

一緒に確認した。気を遣った担任が、二者面談の日を、合格発表の日に合わせてくれた。合格の二文字を見てお志望ではない北大を"受けた"ことが自明だった宗石さんにとって、想定外の事態。

一般的な受験生の感覚とは乖離したものだった。

11月、迎えた入試当日。緊張や不安は全くなかったと宗石さん。だが、高得点は狙いたいというプライドがあった。筆記試験に緩急、面接も穏やかな雰囲気で進行。「物理が好きであること・やる気があること・志望動機を話せて、スムーズに会話ができれば大丈夫」だったという。その日母が持たせてくれた弁当には、いつものテストと同じようにとんかつが入っていたが、あまりに固く食べられなかった。1年後に「あのとんかつは入れないで」と母に頼むが来ることを、当時の宗石さんはまだ知らない。

あっさりと終えたフロンティア入試の翌日からは、定期考査、模試、試験が続き、合否の結果を心配したり、楽しみにしたりする余裕はなかった。東大に向けた受験勉強も再開した。

不完全燃焼の冬と 決意の春

総合型選抜で北大工学部に合格したことは、家族や教師、ごく限られた友人を除き、ほとんど誰にも言わなかった。かつてのクラスメイトでさえ、今も宗石さんの合否発表は、当校の担任と一緒に確認した。気を遣った担任が、二者面談の日を、合格発表の日に合わせてくれた。

「おめでとう」という担任に「ありがとうございます」と返しながら、内心では「受かっちゃった」と苦い思いをかみしめた。ただ、筆記試験の会心の出来を考えれば、当然の結果でもあった。

自分の受験は、始まる前に終わってしまった。勉強してきた英語も国語も社会も、これから力を入れるつもりだった化学も使えなかった。「なんだったんだろう」むなしさが広がる。

その日の帰り道、当時通っていた予備校を訪れ合格報告をしたが、その後はほとんど行かなくなった。

合格の結果に喜ぶ家族や教師、受験に向けて努力し続けるクラスの友人に、「あっけなく、北大合格を手にしてしまった自分、使い切れていない問題集を残して、一度目の大学受験が終幕を下ろした。

不完全燃焼の冬と 決意の春

総合型選抜で北大工学部に合格したことは、家族や教師、ごく限られた友人を除き、ほとんど誰にも言わなかった。かつてのクラスメイトでさえ、今も宗石さんの現況や経歴を知らない人は多いという。

合格発表を受け突然受験生でなくなった宗石さんは、自宅では、両親と一緒に、新聞のクロスワードやナンプレで遊んでいたという。

大学からの課題などと週1回ほど勉強を行う。引退したバレーボール部の活動に参加するなどもあった。目標が消え、暇を持て余すなかで、受験勉強を継続できる周りがうらやましくもあった。それまでやってきたことが突然不要になった虚無感を抱え、くすぶった。

前述の通り、フロンティア入試で合格を得た以上、入学辞退はできない。だから、合格を手にした瞬間、もう一度大学受験に挑戦したい思った。

「落ちてもいいからと思った。ただ、もう一度受けたかった。親は「自分で決めたことならいいんじゃない」と背中を押してくれた。

2度目の大学受験を決心した宗石さん。過酷な仮面浪人生活と孤独な2回目の1年生。それでも「この道がいい理由とは、故郷を愛するこどもあった。目標が消え、暇を持て余すなかで、受験勉強を継続できる周りがうらやましくもあった。それまでやってきたことが突然不要になった虚無感を抱え、くすぶった。

前述の通り、フロンティア入試で合格を得た以上、入学辞退はできない。だから、合格を手にした瞬間、もう一度大学受験に挑戦したい思った。

合否の結果に喜ぶ家族や教師、受験に向けて努力し続けるクラスの友人に、「あっけなく、北大合格を手にしてしまった自分、使い切れていない問題集を残して、一度目の大学受験が終幕を下ろした。

不完全燃焼の冬と 決意の春

総合型選抜で北大工学部に合格したことは、家族や教師、ごく限られた友人を除き、ほとんど誰にも言わなかった。かつてのクラスメイトでさえ、今も宗石さんの合否発表は、当校の担任と一緒に確認した。気を遣った担任が、二者面談の日を、合格発表の日に合わせてくれた。

「おめでとう」という担任に「ありがとうございます」と返しながら、内心では「受かっちゃった」と苦い思いをかみしめた。ただ、筆記試験の会心の出来を考えれば、当然の結果でもあった。

自分の受験は、始まる前に終わってしまった。勉強してきた英語も国語も社会も、これから力を入れるつもりだった化学も使えなかった。「なんだったんだろう」むなしさが広がる。

その日の帰り道、当時通っていた予備校を訪れ合格報告をしたが、その後はほとんど行かなくなった。

合格の結果に喜ぶ家族や教師、受験に向けて努力し続けるクラスの友人に、「あっけなく、北大合格を手にしてしまった自分、使い切れていない問題集を残して、一度目の大学受験が終幕を下ろした。

不完全燃焼の冬と 決意の春

総合型選抜で北大工学部に合格したことは、家族や教師、ごく限られた友人を除き、ほとんど誰にも言わなかった。かつてのクラスメイトでさえ、今も宗石さん

1400km 離れた 学生と奏でる
北大京大 ジョイントコンサート 2024

◀1 面から続く

野村氏は北大ギタークのOBで、現在は多くの札幌のアマチュアオーケストラでコンマスを担当しており、千歳ジュニアオーケストラの代表・指揮者も務めている。北大オケの演奏会で指揮を務めることになったという。

「北海の幻想」は、北海道交響楽団や北大オケで伝統的に演奏されている楽曲だ。ソーラン節のモーフを盛り込みつつ、時に荒々しく時にやさしい北海の雄大な表現を音にした」というこの曲。しかし、2017年に川越氏が亡くなり、コロナ禍で演奏会が減る中で、川越曲は輝かれてきた部分もあったという。野村氏が覚悟したのは、「楽譜が変わって演奏されていた」こと、それを修正できたことはよかった、と振り返る。

学生時代は川越氏の指揮で「北海の幻想」を弾き、当時の雰囲気をよく知る「直弟子」である野村氏。今回の指揮の依頼は、当時川越先生がやっていた通りに伝えること。

「野村氏先生のおかげで昔の姿を取り戻しつつある（武田さん）という、「北海の幻想」。

演奏に参加する京大オケの一松大輝さん（チェロ）は、「京大側は初めてを楽しんでいる雰囲気」だったという。京大オケが野村氏の指揮で幕を開ける。北大オケがバトンを受け取る。

演奏会は両大学の単独曲の後、2校による合同練習。北大オケが「序曲」と「歌劇『イゴール公』より　韃靼人の踊り」。両曲の躍動感が対照的だ。

野村氏は、京大の学生が北海道で演奏することの意義に触れる。普段異なる土地で学ぶ学生たちが、交流を楽しむ。それが結果的に良い演奏につながるだろう、と期待を寄せた。

練習の様子。「人数が多く、とても大きい漁船」と、オケ全体を漁船に例える一幕も（8月24日）

演奏会当日

本番当日、8月26日。札幌の晩夏にふさわしい、穏やかな晴天が広がった。

演奏会は両大学の単独曲で幕を開ける。北大オケが「交響曲第4番変ホ長調『ロマンティシェ』」を演奏。中欧の深い森の空気を後景に漂えつつ、雄しい曲目であることを思わせる。洗練された演奏で観客を魅了した。

各大学の単独曲を終え、次に待つのは合同曲「楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より第一幕への前奏曲」では、京大オケの学生指揮者・池田智之さんが指揮を振る。2楽団の学生が一体となって、格調高い演奏を表現した。

合同曲の曲目は「北海の幻想」。客演指揮者の野村氏が指揮台に立つ。序盤、弦部隊によって表現される日本海の波浪。各楽器の音が絡み合う深い海の雄大さと流の繊細豊かな「北海の幻想」が、会場へと響き渡る。川越氏の意志を継ぐ演奏会の終幕にふさわしい。

演奏会の終わりには野村氏、池田さん、両大学コンマス・武田さんと亀田宗典（そうすけ）さんがそれぞれに花束が贈呈され、会場はあたたかい雰囲気に包まれる。

通常のオーケストラの2倍の人数で演奏される圧巻の「都を弥生」で、演奏会は締めくくられた。

演奏会を終えて 音楽は「世界共通語」

ジョイントコンサートが、「北海の幻想」と「都を弥生」の2つの合同曲に参加した北大オケの小林幹（もとき）さん（工学部2年）はそう語る。

北大オケも、構成員の出身地や楽器歴はさまざま。京都から来てくれた学生と交流することで、「人団当初の気持ちを再認識させられた」と振り返った。

また、個人の技量に大きな差はないことが自信になった一方で、曲の解釈などに内向的な部分の違い、練習への意識、場数をこなしていることによる京大オケとの差を感じた。

一方で市認識したのは、「世界共通語」としての音楽の力。

「どこにいようが、どこからこようが、音楽をするってなると、同じものになる」。普段は遠く離れた地で暮らす学生同士が、音楽を通して学び合い、高め合う。

伝統ある団体に参加できたことを誇りに思うとともに、学生たちの生きた学びが見えた、今回のジョイントコンサート。両オケは5年後、どんな成長した姿を見せてくれるだろうか。

（取材・執筆・撮影：高橋）

北海道大学新聞　創刊100周年
北大新聞は皆様のおかげで2026年5月14日に創刊100周年を迎えます
活動継続のためご寄附を募集しています
寄付は法政のご寄附
北大新聞HP「THE MAINSTREET」